

「聖グレゴリオの家」
 何ともロマンチックな響きの「家」は、東京・東久留米の静かな住宅街にある。十字架を冠した鐘楼、礼拝堂、回廊、校舎……世の騒々しさとは無縁の世界だ。

早く父を亡くし、小学校教師の母に育てられた。音楽が好きで、田んぼ道で気のすむまで歌をうたったものだった。小学校五、六年の時、往年の名ピアノスト、ホルターの弾くシューベルトの即興曲をラジオで聴いて、なぜか泣いた。

「音楽家になる」
 何もわからぬまま、心に決めてみる。くる日もくる日も発声練習とか基礎的なことは夕、学校のオルガンを弾きまくった。キリスト教との出会いはそんな時だ。

教会オルガニスト
橋本 周子さん

ツまで来たんじゃない、と嘆いたものでした」
 でも、土音さえしつかりしていれば、どのようにも展開できる。悟ったのは、ずつとこのことだった。

「木の根や幹を見ずに、美しい花やおいしい実だけを摘んできた人は、伸びることなくダメになってしまいます」
 もの静かな人だが、気持ちが高じると早口になる。
 七年間、ドイツで得たことを



西独のハープで子供に美しい音を——カメラ・里中 英二

新 淑女 録

開設した念願の家は、ローマ・カトリックの典礼聖歌、グレゴリオ聖歌を編み込んだローマ教皇・グレゴリウス一世にちなんで名づけた。
 最初は先生二人と生徒八人、十一年目の今年は先生十九人、生徒は百人を超える。構成もミサのオルガン演奏や聖歌隊の指導をする教会音楽家の養成部門、音楽や古楽器のクラスなど。ここに子供の音楽教室には、子供を音楽で遊ばせるために、西独で買求めた楽器がある。
 「この子供用ハーブは、強く弾いても小さな音しか出ないから、子供は耳を澄ます」ことを覚えさせます。こちらの鉄琴は下の音が抜けるから、弾き始めたらなかなか終わらない」
 せつかく音楽の楽しさを知った子供が中学に入ると、音楽をやめさせて執拗いさせる親たち

信仰と憩いのユートピアを守る

ここでも 女 が主人公

「た」
 「た」といふ字は、一種の賭けに勝った優越感みたいなものだなあ、と思っかも知れない。
 しかし、川柳はもっと深い意味の大衆文芸である。
 危機まっ只中
 人生を見つめ
 これは「切実な人生観」なのだ。
 たとえば、上司に直言したいことがあっても、それを言えは上司の機嫌を損なうか左遷されるか、まかり

オトコに捧げろ一句

時実 新子

まぢがえは首がとぶかも知れない。家族の顔がちらつくとつおいつ考えて、心を決めて直言してみると、意外にも「君はよい意見を言ってくれたよ」なんてことになって株が上がったりするところがある。それが「生きていく」ことである。
 また、もう一歩鑑賞を進めれば、世界は今あらゆる危機のまっ只中にある。毎日黄信号のようなもの。それを知りつつ働いているお父さんたちに感謝し、私から捧げたい一句である。(川柳作家)

「信号の黄に突っ込んで生きている」

天根章草



悦子

「背筋をしゃきつと伸ばして、「二」新のあと父は百姓から巡査になり、町長になり」と、一世紀余の歴史のページを繰るようにして話が始まる。
 「母はクリスチャンで、よく西洋料理やパンを作っていました。私が十四のとき病気で急死するんです。それで私は医者になろうと思っただけ、あのころは女が入れない学校はない。男の中学校は出世コースだけと女学校は花嫁学校で資格がとれない。で、師範学校へ行って小学校の教師になったんです。ところが修身の教科書がね、私にも出来ないことを生徒に要求するの。先生たちは、教師は教科書通りにやればよい



粗末に、バラン

香川 綾さん(女子栄養大)

香川 綾さん(女子栄養大)

「先生

この句はアサヒケラフの「川柳新子座」の八九年の大賞に輝いた句である。